

国際協力でオンリーワンのまちづくりを



熊本県葦北郡芦北町長  
竹崎一成

不知火海に面する人口約2万人の小さな町、熊本県葦北郡芦北町は、まちづくりに国際協力事業を積極的に取り入れており、国内外から注目を集めている。それを率いる竹崎一成町長は、正しい国際感覚を持った人材を育てたいと、施策の一つに国際交流・協力を掲げ、13年にわたって活動を推進してきた。その内容は、カンボジアの学校建設支援、青年海外協力隊の派遣条例、開発途上国からの研修員受け入れ、フィリピンでの植林…と幅広い。

長年の取り組みの成果は、町民の郷土に対する誇り、そしてまちづくりへの意欲が高まっていること。竹崎町長は、JICAと連携を深めつつ、これからも身の丈に合った取り組みを続け、国際協力でオンリーワンのまちづくりをしていきたいと考えている。(続きは裏ページへ)

## 「正しい国際感覚を持った 人材を育てたい」

熊本県葦北郡芦北町長

### 竹崎 一成

Takezaki Kazunari

1947年熊本県葦北郡芦北町出身。71年福岡大学法学部卒業後、会社員を経て、75年に28歳で芦北町議会議員に最年少当選。5期連続当選の後、94年に47歳で芦北町長に就任。まちづくりの施策に「国際化の時代にふさわしい人材の育成」を掲げ、国際協力事業を積極的に推進。2000年、芦北町は世界に開かれた町に贈られる自治大臣表彰を受賞した。



photos by Tanimoto Mika

町長に就任したころ、「国際化」や「国際交流」という言葉が新聞をはじめあらゆるところで飛び交っていました。服装一つ取っても、日本製を見つけるほうが難しいくらい、経済面では国際化が日常的になり、自治体は国際化の方法として姉妹都市関係を結ぶことに奔走していた時代でした。

しかし私は、「わが町にとって国際化とは何であり、国際交流はどうあるべきか」を考察してから施策や事業を展開すべきだと考えました。ただ時流に乗って取り組むのでは、根柢が希薄なものになってしまうからです。また、議員時代の中国や韓国での研修を受け、隣国同士であまりに歴史観が違うことにショックを受けたとともに、私自身「視野が広がったな」「柔軟に物事を考えられるようになったな」と自覚するものがあり、海外を見ることは重要だと実感しました。ですから選挙公約に「国際化の時代にふさわしい人材の育成」と掲げ、町長になってからはこの分野の経験や造詣が深い県内の人を集めて「芦北町国際化・国際交流検討委員会」を組織し、その答申に沿って事業を進めてきました。

最初に取り組んだのは、カンボジアへの学校建設支援です。検討委員会の答申で「国際交流友の会」を設立し、その会長だった小学校長が勤務する芦北町の中心校、佐敷小学校の児童会が全校生徒に呼び掛けたことを機に、チャリティーバザーを始めました。次第にその輪は町中に広がり、活動開始から5年後の2002年にはプノンペン市に1校目の学校を贈りました。子どもたちはその都度カンボジアを訪問し、現地の生活を体験したり、小中学生と交流しており、その数は100

人を超えました。

また2000年には、九州の町村では初めて、青年海外協力隊の派遣条例を制定し、帰国後も同じ職場で働けるよう地方公務員の身分を保障しました。帰国隊員の再就職が大変困難だと聞き、「有為の青年が国際貢献で海を渡り、頑張ってきたのに、帰ったら仕事がないなんてそんなおかしな話があるんだろうか」と思いました。そして役場からは、01年に第1号の職員がニカラグアに派遣され、現在2人目がボリビアで活動中です。これに連動するように、シニア海外ボランティアとしてパラグアイへ行った町民の方もいます。

地方が国際交流・協力を推進する意義については、やはり、活力あるまちづくりにおいて、わが町はほかと違うという点を打ち出せることだと考えます。過疎化や高齢化など多くの問題を抱える地方にとって、自分の町をきらりと光る存在足らしめるための取り組みは、町民としての誇りを持つ上でもとても重要なのです。しかも、子どもたちが国際貢献や世界平和の大切さを学ぶことは、同時に、わがふるさとを見直し、愛情をはぐむきっかけとなる。そのチャンス子どもたちに与えていきたいんです。

小学生のころカンボジアの学校建設支援に携わり、今は結婚して親になった青年が、「自分の子どもにも世界に目を向けてもらいたい」と願っているそうです。息の長い取り組みですが、世界とのつながりが生み出すものは数え切れません。芦北町の国際化に向けた活動を継続・発展させ、これまで育ててきた大きな幹に枝と葉をたくさんつけていければと思います。